

図3 日米株価レシオと円・ドル相場の推移(中期)

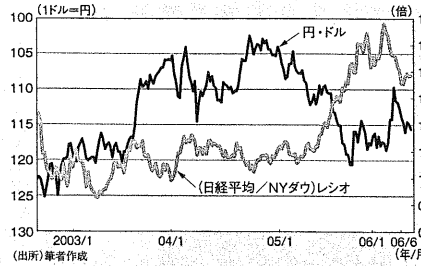


図4 日米株価レシオと円・ドル相場の推移(短期)

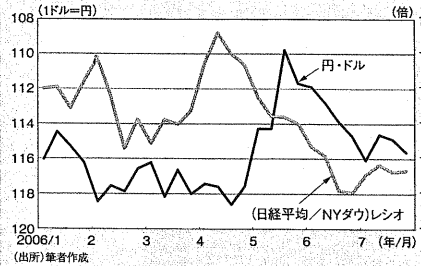
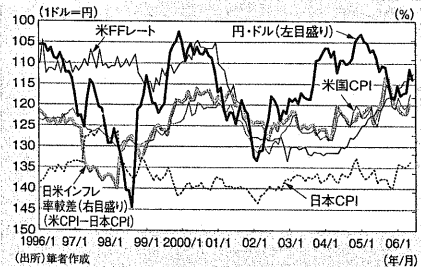


図5 こんなにきれいな日米インフレ率較差と円・ドル相場の関係



時代は「教育型の株式投資スクール」

【スタディ&アドバイズ】これが123株式マネースクールが提供する新しい形の株式投資スタイルです。少額資産の個人投資家が自分で考え、自分で儲けられるようになる術を磨き、なにかプロのアドバイズが受けられる、完全レポート体制が好評の株式投資スクールです。

＜永久会員＞限定募集！お気軽ににお問い合わせください。

永久会員募集！5万円/1クール(2.5時間×6回)×無制限

「自立出来るまで無制限に再受講できる永久会員を下記の教室で募集しています。限定募集ですので、株をビジネスとして、真剣に勉強したい方のみお申込ください！」

大阪校 京都校 名古屋校 ※1クール以降は、何度受講しても受講料は無料です。
 広島校 岡山校 岐阜校 ※ご希望の方は、随時無料コンサルティングと学校内容のご説明をさせていただきます。

お申し込み
お問い合わせ **123株式マネースクール** 主催 日本投資技術協会
 大阪市西区北堀江2-14-18 TEL.06-6533-9323
<http://123money-school.com>

テーマ2

「日米のインフレ率の差から見る限り、引き続き円高・ドル安圧力がかかっている」と見るべきだろう。中期的にはドル安を誘む向きが多いが、その理由の一つとされるのが、日

影響力のほうが断然強かったのです。いうまでもなくこの時期は、米国の政策金利が先継ぎ早に引き上げられ、日米の金利差が急速に拡大した時期に当たります。

もう一方の図4は、今年に入ってから動きを示したものです。今年に入ってからは総じて、株価が相対的に高くなったほうの通貨が高くなるという関係が認められます。

米のインフレ率の差である

さてこのテーマ2のコンテキストはどうでしょうか。おそらく為替相場を巡るメカニズムのなかで最も分かりにくいと思います。なぜなら「インフレ率の差がマネーの流れにどのように影響するか」が直感的に分かりづらいからだと思えます。

「金利が高いほうにお金が行く」とか「株価が順調に上がっているほうにお金は引き寄せられる」とも分かりやすいと思えます。しかし、それらに比べると「インフレ率の差」は直感的な理解を許さない雰囲気があります。が、決してそうではありません。

購買力平価説とは？

さて、この考え方は「購買力平価説」(為替相場の決定を各国貨幣の購買力で説明する理論)として非常に重要視されている考え方です。とくに中期的な為替相場の方向性を知るためには大切な材料なので、表3で順をおって説明しておきます。次はその「証拠」です。図5で見ると、米国のインフレ率が相対的に高くなると、円・ドル相場も「円高・ドル安」に動くケースが多いことが分かります。外国為替相場を見るうえで、最低表3で説明した四つのステップはチェックしておきたいところです。(角川 総一)

表3 「購買力平価説」とは

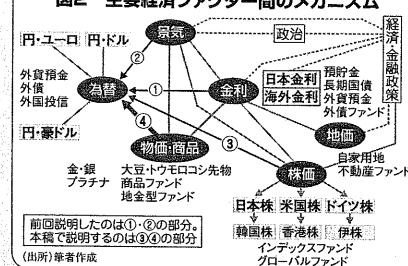
ステップ1: 全く同じ品質で同量のビッグマックが東京では200円、NYでは1ドルで売られているとしましょう。この場合、ビッグマックだけを基準にする限り「1ドル=200円」という為替相場が最も好都合です(通貨が違っても同じものが同じ値段であるため)。

ステップ2: 1年後、東京のビッグマックは200円で変わらず、物価が上がったNYでは2ドルになってしまいました。この場合には「1ドル=100円」が合理的であると考えられます。仮に為替が1ドル=100円の円高・ドル安になれば、ステップ1と変わりません。

ステップ3: つまり物価上昇率が高い通貨の相場が下落するのが自然です。

ステップ4: 別の言い方をしてみよう。ステップ1でも2でも「200円」という円の購買力は全くな化していません。ところがNYでの1ドルが持つ購買力はステップ1の時には「ビッグマック1個」にしかすぎません。つまり「購買力が低下したドルの外国為替市場における価値が下がった」のです。つまりそれぞれの通貨の相場は「購買力に比例する」という考え方なのです。

図2 主要経済ファクター間のメカニズム



前回に続き、最近急速に方向感を見失っている円・ドル相場を読むための基本を説明します。

その前に図2をご覧ください。この図2は、為替相場はそれ以外の外部

部ファクターからどのような影響を受ける可能性があるかを、単純な図柄として示したものです。

昨今は、前回触れたテーマである①の矢印「日米の金利差が円・ドル相場を動かす」というメカニズムに焦点を当てた報道記事が多く見受けられます。7月に入ってから、イスラエルのレバノン侵襲、北朝鮮のミサイル発射といった地政学的要因が米ドルを押し上げるといった動きも加わってきました。これから中期的なスパンで円・ドル相場を見るうえで①、②以外に重要なテーマが③の矢印である「両国の株式市況の足取りの差が為替相場に影響する」。そして④の矢印である「双方の国のインフレ率の差の変動が為替相場に影響する」なのです。なぜでしょう。

テーマ1

「相対的に米国の株式の足取りが日本に比べてしっかりとれていることから、ここしばらくはドルが円に対して強含みの展開を示している」

これはことさら理由を説明しなくてもお分かりだと思えます。一般的には「相対的に株価がしっかりとれている通貨が買われる」という傾向があります。

円・ドル以外の通貨に目を向けてみれば、最近までは「新興工業国(インド、中国、ロシア、ブラジル等)の株価の好調さ加減がこれらの国への

の通貨流入を通じて、為替相場を引き上げた」とことは記憶に新しいところですが、ところが、世界的な利上げに伴い「株式から債券へ」という流れとともに、その流れが逆流して新興国株が急落したこともつい先だったことでした。

この種のメカニズムは長期的に見ても具体的なデータにより実証できます。図3と図4では、日米の株式市況の足取りの差を単一のデータとして見るために、「日経平均株価」を「NYダウ」で割った数字を「日米株価レシオ」として示しました。ところが、04年10月ごろから05年末までは、以上の理屈を裏切っているように見えます。図3。この理由は簡単です。前回ご紹介した「金利差が為替相場に影響する」という

投資のツボ
 マネーメカニズム
 入門講座 第2回
 為替相場はなぜ動くか
 その2

前回に続き、最近急速に方向感を見失っている円・ドル相場を読むための基本を説明します。

その前に図2をご覧ください。この図2は、為替相場はそれ以外の外部

部ファクターからどのような影響を受ける可能性があるかを、単純な図柄として示したものです。

昨今は、前回触れたテーマである①の矢印「日米の金利差が円・ドル相場を動かす」というメカニズムに焦点を当てた報道記事が多く見受けられます。7月に入ってから、イスラエルのレバノン侵襲、北朝鮮のミサイル発射といった地政学的要因が米ドルを押し上げるといった動きも加わってきました。これから中期的なスパンで円・ドル相場を見るうえで①、②以外に重要なテーマが③の矢印である「両国の株式市況の足取りの差が為替相場に影響する」。そして④の矢印である「双方の国のインフレ率の差の変動が為替相場に影響する」なのです。なぜでしょう。

これはことさら理由を説明しなくてもお分かりだと思えます。一般的には「相対的に株価がしっかりとれている通貨が買われる」という傾向があります。

円・ドル以外の通貨に目を向けてみれば、最近までは「新興工業国(インド、中国、ロシア、ブラジル等)の株価の好調さ加減がこれらの国への

の通貨流入を通じて、為替相場を引き上げた」とことは記憶に新しいところですが、ところが、世界的な利上げに伴い「株式から債券へ」という流れとともに、その流れが逆流して新興国株が急落したこともつい先だったことでした。

この種のメカニズムは長期的に見ても具体的なデータにより実証できます。図3と図4では、日米の株式市況の足取りの差を単一のデータとして見るために、「日経平均株価」を「NYダウ」で割った数字を「日米株価レシオ」として示しました。ところが、04年10月ごろから05年末までは、以上の理屈を裏切っているように見えます。図3。この理由は簡単です。前回ご紹介した「金利差が為替相場に影響する」という